

新婦人との出会いがわたしの原動力に

三重・四日市支部 加藤友紀

「やりたいことはたくさんある」。タフな何でも話せて、活動できる仲間との出会いを探していたという三重県の新婦人加藤友紀さん。新婦人との出会い、思っていた生き方に近づいているといいます。第32回全国大会での発言に加筆し、紹介します。

三交流で出会えた

「三交流で出会えた。新婦人に入るまで、転職で越してきた四日市に知り合いもおらず、日々の生活、ニユースを見ては落ち込んだり、職場の旧態依然としたジェンダー観や風習にイライラしながら、日々の生



全国大会で発言する加藤さん

活に追われていました。選挙のボランティアやデモなどに時々参加し、「もつと息を吐くように社会運動がしたい」「同じように活動する人たちに会いたい」と思っていました。そんな中で新婦人に入会する決意になったのは、次世代全国三交流(月一回オンライン)でした。明るくパワフルに社会を変えようとする仲間がいるみなさんのパワーを感じ、「仲間がここにいたのか」と思いました。全国規模でさまざまな活動をし、連帯の場となっている新婦人は魅力的で、自分が今までできなかったこ

とがこなれていくと感じました。入会してからは、何よりも支部のみなさんが温かく迎え入れてくれて、そのことだけでも入ってよかったです。県次世代メンバーのしんぶん読む会「メイン」では、気兼ねなく政治の話ができて、お互いの近況や活動を話して盛り上がり、応援しあう空気感に元気をもらっています。新婦人は、社会人になってから初めてできた、職場や家族以外の居場所として、たくさんの学びや活動を続ける原動力をもらっています。

原水爆禁止世界大会に参加し、その後の支部ピースフェスタで報告するという経験もさせてもらいました。ピースフェスタは準備段階から参加し、みんなで一つのイベントを作り上げた感動、それぞれの班の企画や展示の魅力にも触れ、すてきな思い出となりました。全国大会(11月)では、各地の支部、班のとりくみ、たくさんの仲間の平和と平等を願う声を聞き、自分自身も発言することで「これからはがんばるぞ」という気持ちをいっそう強くしました。また、仲間づくりにかける熱量を目の当たりにし、新婦人を大きくする重要性も身にしみて感じました。

全国に仲間がいる！

国会行動には、新しく入会した2人の仲間とともに参加しました。そのうち1人は、パレスチナ連帯のスタンディングのとき社会運動の意味などを話したことで新婦人に興味を持ち、入会してきてくれました。自分1人で完結せず、思いを伝え、つながっていくことができたうれしい出来事でした。初めての国会行動は緊張しましたが、省庁交渉に参加したみなさんの要求や

は、各地の支部、班のとりくみ、たくさんの仲間の平和と平等を願う声を聞き、自分自身も発言することで「これからはがんばるぞ」という気持ちをいっそう強くしました。また、仲間づくりにかける熱量を目の当たりにし、新婦人を大きくする重要性も身にしみて感じました。



あの日から15年

浪江町民 門馬昌子

「2011年3月11日から私の人生はガラッと変わってしまった。こう話すのは、福島県浪江町から東京へ避難した門馬昌子さん(82)です。東日本大震災による東京電力福島第一原発事故から15年。長引く避難生活で体調を崩して亡くなる「震災関連死」が後を絶ちません。3808人(24年12月末時点)の6割が福島です。門馬さんの手記を6回にわたり紹介します。

避難3年で亡くなった夫

私にとって原発事故の最大の被害は、夫の死だ。夫、門馬洋は高校教師を退職後、町内会の活動に力を入れ、生きいきと毎日を送っていた。被災前の2010年5月5日、娘夫婦が孫を連れてきて家族全員で撮った写真がある。この時が、夫の人生にとって最も幸せな時だったのだろう。原発事故で私の住む浪江町だけで約21000人、県内で16万

主張

「高市政権が誕生してから、物価高騰もジェンダー平等もなにも前に進んでいないのに、選挙なんて」。読者から寄せられた声です。本来であれば来年度予算の審議が行われるときであり、突然の大義なき解散は、政治と力ネ、統一協会との癒着など国会での追及を逃れるためです。置きざりになっているのは、私たちの暮らし、人権です。過去最高の9兆円超の軍事費、イスラエル製の武器購入。着々と戦争準備がすすめられています。選挙の中でこそ、対話とおしゃべりを広げる時です。高市首相の

対話とおしゃべり、広げて選挙の中でこそ新婦人大きく

支持率の高さに悶々としている会員、読者、まわりの女性たちと一緒に班会や小組例会でも、新婦人しんぶんを読んでおしゃべりしましょう。選挙特集の新婦人しんぶん「号外」を緊急に発行します。ぜひ、ご活用ください。広島・福山支部はシール投票の宣伝行動にはじめてとりくみ、60人と対話。「高市首相に期待する」が多いものの、この情勢に「不安」を感じる同じ思いの人ともたくさん



2人の新しい仲間と国会行動で



原発事故の前年、家族で

間が一緒だ、今も全国でがんばっている。そう思うことが、1人でふさぎこんでしまいがちなわたしを部屋から引っぱり出し、前を向かせてくれる心強い支えとなっています。